2023 年 2 月 2 日放送

ストレスと漢方⑥

症例からみた心身症の治療　機能性消化器症状

三重大学医学部附属病院　漢方医学センター　　高村　光幸

みなさんこんばんは。晩上好！

これまで、心身症としてよく取り上げられる疾患に関する、漢方治療の概説を行ってきました。今回からは、実際の症例を紹介して、具体的な治療についてお話してみようと思います。

今日はまず、機能性ディスペプシア、過敏性腸症候群といった、機能性の消化器症状について考えてみます。

（2 枚目）
機能性ディスペプシアに対する漢方治療としては、六君子湯がファーストチョイスのような位置づけであることをお話しました。また、茯苓飲、人参湯、安中散、半夏瀉心湯、加味逍遥散といった処方や、六君子湯に四逆散、柴胡桂枝湯、香蘇散などを合わせることについても紹介しました。

このうち、六君子湯に四逆散を追加したところ、他の症状も改善した症例を紹介しましょう。

40 代女性。糖尿病にて加療中です。以前から消化器内科で、機能性ディスペプシアと逆

流性食道炎のオーバーラップの症状を指摘されていて、六君子湯が効果的として継続処方されています。しかし異動となった職場で受けるストレスが強くなり、胃腸症状だけでなく、肩こりや後頚部痛、下肢のだるさが続くとして受診されました。みぞおちの痞え感やキリキリと痛む感覚に、咽の痞え感も伴います。ガスが溜まりやすく、おなかの張りがあるといいます。不安や不眠があり、以前から精神科より SSRI や睡眠薬が処方されていました。漢方的な診察によると、腹力はやや弱めながら、胸脇苦満、心下痞硬を認めます。舌は淡紅色で薄白苔、歯痕をみます。脈は沈でやや弦。よって、ストレスに伴う胃腸症状の悪化と、筋緊張からくる肩こり、背部痛と判断しました。五臓では肝、心、脾のバランスが悪く、肝気鬱結から肝血虚に進み、さらに脾虚が悪化しているようです。六君子湯は継続のまま、四逆散を追加したところ、胃腸症状とともに、肩こりや頭頸部痛も改善をみました。六君子湯と四逆散を併用するのは、柴芍六君子湯の構成に近い組み合わせとなります。この 2 剤を基本として、数年の加療を続けていただき、目立った増悪はありませんでした。

（3 枚目）

次は、六君子湯と香蘇散を併用した症例についてお話します。

50 代女性。パニック障害の既往があります。ちょっとしたことで心窩部痛が起き、複数回の上部消化管検査を受けてきましたが、臨床的には機能性ディスペプシアと考えられる症状が続く方でした。神経過敏で、過呼吸発作も何度か起こし、救急搬送をされることまであります。アレルギー体質なのか、ノセボ効果を感じやすいのか、すぐ薬によって不快な症状がでやすい理由から、定期的な精神科治療は受けていませんでした。高血圧を指摘され、内服を始めましたが、それによっても心身が不調で安定しませんでした。診察しますと、腹力は弱めで、脂肪が多く、胸脇苦満と臍傍圧痛を認めます。脈は沈で渋脈、舌は淡紅色ながら瘀斑を伴い、歯痕も著明です。六君子湯と香蘇散を合わせて処方しました。こちらは香砂六君子湯を意図した組み合わせです。内服開始後は、それまでの不定愁訴気味の傾向も安定し、胃腸の調子も悪くなることがほとんどなくなり、長期にわたって有害事象なく継続していただきました。

（4 枚目）

次の症例は、柴胡桂枝湯で改善がみられた方です。

60 代女性。卵巣摘出術の既往があり、それ以来癒着性の腸閉塞を繰り返すといいます。主訴は胸部、背部の不快感で、胃や食道の炎症由来の症状を疑われていますが、上部消化管検査にて明らかな所見はないようです。何度も消長、増悪を繰り返し、心身症の症状とされ、心療内科なども受診しましたが改善なく、漢方治療を勧められて受診されました。胸骨あたりの気持ち悪さ、痞え感、ソワソワ感があるといいます。夕方にかけて悪化し、胸肋部から背部へ痛みも起こり、おなか全体が張るとのことでした。ゲップも多く出ます。食後に発汗し、汗が引くと不快な症状は楽になるとのことでした。脈は細弦、舌候は

淡紅からやや淡舌で、全体に薄白苔、歯痕をみます。腹力中等度、胸脇苦満ははっきりしませんが、心下痞硬と臍上悸を認めます。小腹不仁と小腹鞕満、すなわち瘀血を示唆する所見も認めました。柴胡桂枝湯を処方したところ、気持ち悪さが少しマシになって食欲も出てきた、ゲップが減ったといいます。2ヶ月くらいの服用で症状が気にならなくなってきました。半年の加療で柴胡桂枝湯は廃薬できました。

（5枚目）

さて、過敏性腸症候群では、桂枝加芍薬湯、桂枝加芍薬大黄湯、小建中湯、半夏瀉心湯などがよく用いられるというお話をしましたが、次に紹介する症例は、心配性が背景にある過敏性腸症候群に、半夏瀉心湯が有効だったものです。

70代女性。降圧剤、糖尿病治療薬の服用があります。原因不明のふらつきを主訴に、漢方治療を希望されました。倒れることはないものの、歩くときに酔っ払いのようにふらつくという主訴でした。他院での画像検索などでも異常は認められず、加齢に伴うものとして様子をみられていました。また、精神的に不安定で喜怒哀楽がはっきりしていて、少し食べ過ぎると必ず下痢になるといいます。腹痛がよく起こり、便意を伴いますが、排便すると痛みが改善するとのことでした。テレビなどで病気のことを見聞きすると、すぐその病気ではないか、心配になるといいます。心臓とも頭ともいえず、拍動がするといいます。診察してみますと、腹力はあり、小腹不仁が認められます。目立って心下痞鞕や臍上悸があるわけではありませんでした。脈は沈、実、弦で、舌はやや紅色、浅い裂紋が複数みられました。下痢型IBSの解説でお話した、原南陽の『叢桂亭医事小言』を思い出してください。心中不安で動悸、心煩するものには半夏瀉心湯もよいとありましたね。この方は、精神不安を背景に、めまいや動悸、過剰な心配があり、腹痛下痢といった消化器症状などを呈していましたが、半夏瀉心湯を処方すると、これら諸症状は改善し、その後数年にわたって欠かさず服用されていました。長期投与でも、血液検査を含め有害事象なく、この処方だけで諸症状が安定して経過した症例です。

（6枚目）

最後にもう一例ご紹介しましょう。過敏性腸症候群ではありませんが、長年の便秘症に悩んでおられた方です。

50代女性。若いころより便秘症で、下剤がないと排便しないといいます。子宮頸癌の既往がありますが、特に腹腔内に便秘の原因になる器質的な病態はみつかっていません。非常に心配性で、不安、不眠を訴えます。場所の移ろう痛みがあり、急に胸が締め付けられることも多いようです。腹力はやや弱めで、右胸脇苦満、臍上悸、小腹不仁を認めます。脈は左右差あり、右は弦で、左は細く渋脈でした。麻子仁丸を処方したところ、内服開始からすぐ、腹痛を伴わずに1日2回程度すっきり排便できるようになりました。こんなに

良くなるなんて驚きだとも話されていましたが、どうも背景には、既往歴からくる再発不安があるようでした。長期に心配が続くことで、五臓の肝に気がうっ滞し、元来弱い脾の力を、さらに弱めているようです。2 年ほどの継続の間、次第に不定愁訴も改善していきました。麻子仁丸は、一般に老人の便秘に頻用されますが、小承気湯という処方構成を含んでいます。すなわち、大黄、枳実、厚朴です。停滞した気を巡らす生薬が含まれているので、気滞によって起こる便秘や諸症状にも、応用できる可能性があるということになります。